【02-B2-001】　家庭への訪問等による支援を中心に指導・援助した事例（中学校３年生Ｓ子）

# 進路実現に向けて継続した働きかけをおこなった事例

キーワード：**家庭との効果的な連携の視点**　**家庭訪問－支援の視点**

この事例解説では、中学卒業後の進路につなげた家庭への訪問等による支援の視点に焦点をあててまとめました。

▲▽　▲▽

## 問題の概要

Ｓ子は小学５年の時に両親が離婚し父親に引き取られ、母親は兄と暮らすことになった。父母の離婚後、Ｓ子は休みがちとなり、小学６年の時は全く登校できなかった。

また、父親も離婚後精神的にまいり、病気で休職するなどしたが、その後勤務できるまでに回復した。

Ｓ子は小学校卒業式にも当日参加できず、後日、父親と校長室で卒業証書を受け取った。

その後、Ｓ子は小中学校双方の働きかけにより、中学校の入学式には参加できたが、翌日からまた登校できない状態となった。

中学１年の三学期に、一時期同学年の女子と二人で保健室登校ができるまでになったが、中学２年になり、保健室登校をしていた同学年の友だちが教室に戻るようになってからは、Ｓ子は再び不登校となった。

Ｓ子は中学３年に進級した後も登校できない状況が続き二学期を迎えていたが、これまで学校は中学１年の休みはじめの頃から、毎月２回ほど担任らが家庭訪問を行っていた。

学校ではＳ子に対し、卒業後の進路に向けた働きかけが必要と考え、新たに学校適応相談員による家庭訪問を週１、２回行うこととした。

Ｓ子本人は、日中に家事を行い、猫を大変かわいがり一人で家にいることが多い。外に出ることはほとんどない状況で、父親と二人暮らしを続けている。

## 対応の概要

### １　学校の継続した家庭訪問

中学３年になりＳ子の担任は替わったが、中学２年までの担任と同様に、月２回の家庭訪問は４月から継続していた。

また、中学３年の担任も家庭訪問の初めはＳ子と会えないことが多かった。しかし、一学期末頃になると、それまでの玄関先での父親の対応だけであったものが、担任を家の中に入れてくれるようになった。

やがて、家庭訪問でＳ子とも会えるようになり、父親やＳ子と進路についての話ができるようになってきた。

### ２　進路に向けた家庭への訪問等による支援

担任らが中心となって、中学３年の夏休み以降の家庭訪問では、登校できないＳ子に対し卒業後の進路に関わる情報の提供等を積極的に行うように努めた。

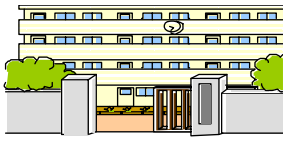
Ｓ子に対し直接登校を促す働きかけと、家庭への訪問等による学習支援を積極的に行うことにした。

### ３　主な指導・援助方針と対応

①　長期間にわたり登校できないＳ子に対して登校を目標とするかかわりと、中学校卒業後の進路実現を目標にし、家庭への訪問等による働きかけやかかわりを継続する。

②　担任を中心とした家庭訪問に加えて、新たに学校適応相談員による訪問等による支援を毎週最低１、２回実施する。

また、父親との協力を得てＳ子への学習支援を工夫しながら行っていく。



## 実践のポイント

家庭への訪問等による支援の視点についてまとめてみた。

**◆◇家庭への訪問等による支援の視点１◆◇**

**訪問等による支援を積極的に行っていくことにしたのはなぜでしょうか？**
**－「社会的な自立」に結びつく働きかけを－**

Ｓ子が、このまま登校できずに中学校の卒業

の時期をむかえるのではないか。学校生活で培う「社会的な自立」につながる学力や他の人との関わり方が身に付かずに、就学義務の年限が過ぎてしまうのではないかという心配があった。

このような状況に対して、残された卒業までの期間、登校を促す働きかけをするばかりではなく、家庭への訪問等による「学習支援」をとおして本人の卒業後の進路実現に向けた働きかけを学校側から積極的に行うことにした。

この働きかけを通じて、将来の「社会的な自立」に結びつけて行こうと考えた。

### ◆◇家庭への訪問等による支援の視点２◆◇

**進路実現に向けた働きかけを積極的に行うようにしたのはなぜでしょうか？**
**－「学習支援」を大切にした支援を考える－**

Ｓ子は、不登校が継続している中学校への復帰を果たすことと卒業後の進路についても大きな不安を抱えていた。

登校を促す働きかけは今後も続け、仮に中学校復帰が果たされない場合でも、中学校卒業後の希望進路先の登校等につながることを期待し、進路実現に向けた「学習支援」を中心に、家庭への訪問等による働きかけを積極的に行うことにした。

このことをとおして学びへの意欲や学ぶ習慣を身に付け生涯学習の基礎となる学力を育てることにつなげたいと考えた。

### ◆◇家庭への訪問等による支援の視点３◆◇

**家庭への訪問等による支援はどのようになされたのでしょうか？**
**－「社会への橋渡し」につなげる関わりを－**

Ｓ子が長期にわたり不登校を継続し、外出も少なく、一人で家の中にいることが多い生活においては、他の人との関わり方や集団生活で培われる社会性を身に付ける機会がないままに過ごすこととなっている。

そこで、基本的な生活習慣や規範意識、集団生活における他人を気遣う気持ちなどをはぐくむ社会性の育成のためにも、担任をはじめとする学校の職員や学校適応相談員が分担し合いながら、家庭への訪問等を行うこととした。この訪問では、Ｓ子と積極的に関わりをもつような学習支援を中心に働きかけを行った。

また、この積極的に関わりをもつような働きかけをとおしてＳ子は他の人との関わり方を学び、少しずつ社会性を身につけていく機会となり、将来の「社会への橋渡し」につなげたいと考えた。

### ◆◇家庭への訪問等による支援の視点４◆◇

**保護者とはどのような連携を行ったのでしょうか？**
**－保護者にはＳ子と学校のパイプ役に－**

学校から担任らによる家庭への訪問等は月２回をこれまで通り継続した。さらに学校適応相談員による訪問等を曜日と時間を定めて、毎週１、２回実施することにした。

また、学校から家庭への訪問等による支援を行う曜日以外で、父親には週に一度、勤務が終わった後に学校に来ていただいた。

Ｓ子が取り組んだプリント類を届けてもらい本人の様子に関する情報交換を行ったり、進路に向けた父親やＳ子本人の意志や考えを確認したりする機会と位置づけた。

さらに父親には、Ｓ子本人の家庭での生活や学習について、本人に対する学校からのはげましの伝言をお願いするなど、本人と学校のパイプ役になっていただいた。

### ◆◇家庭への訪問等による支援の視点５◆◇

**家庭との連携ではどのような点に配慮したのでしょうか？**
**－家庭にはＳ子の成長の様子を伝える－**

学校から家庭への訪問等による「学習支援」は、父親が仕事で家庭にいない時にＳ子本人に行われている。

その際の本人の様子を父親に伝える時には、Ｓ子ががんばって取り組んだ様子などを中心に本人の小さな変化や成長の様子を伝えるように努めた。

このような配慮は、学校と父親や家庭との連携を図るうえで有効な一方法となったほかに、家庭でのＳ子と父親との良好な関係の維持にもつながるものとなった。